

受付番号

留学・研究計画書

氏名 岡戸 香里	留学機関名 ガジャマダ大学
留学先国名 インドネシア	留学期間 西暦 2010年8月～2011年7月
研究テーマ 伝統芸能の新たな存在意義：コミュニティへの社会包摂的な応用の研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>中部ジャワでは、ジョクジャカルタ、スラカルタの2都市を中心に、古くから豊かな伝統上演芸術（舞踊、ガムラン音楽、影絵芝居など）が育まれてきた。それらの多くは、オランダ植民地支配のもと、4つに分裂した王家を中心として発展してきたが、インドネシア独立後、王家は経済的困難からそのスポンサーでいられなくなり、多くは王宮の外へ流出して大きく変化し、衰退の途をたどっている。中部ジャワでは民間で発達してきた伝統芸能も盛んであったが、それらは現代において、以前のように生活に密着した娯楽や通過儀礼、儀式の一部として存在し続けていくことは難しくなっている。</p> <p>その中で、より現代的な社会の要請にこたえる伝統上演芸術を使った活動として、障がいのある子供たち、少年院に入っている子供たちへのガムラン音楽教育、舞踊を使ったワークショップと共同作品作りなどが近年始まっている。また、ジャワへ移住した中華系の人々がジャワ社会へ溶け込み、共生していくためのツールとしても使われており、よりインクルーシブな社会構築のために伝統的な上演芸術が使われ始めている。その一方で、王宮や公的教育機関が中心となって、先祖から続いてきた、消えつつある伝統芸術を掘り起こし、次世代へ伝えていこうという活動も盛んになってきている。これらの活動のせめぎあいのもと、伝統上演芸術は新しい価値観とともに、コミュニティでの新しい地位を模索しているようにも見える。本研究では、そのような、現代ジャワ社会における伝統芸術の正統的な継承と、よりインクルーシブな社会構築へ向けた取り組みの大きく分けてふたつの活動を通して、現代ジャワ社会における伝統芸術の役割とコミュニティにおける可能性を探る。</p> <p>本研究で取り上げる活動の多く、そしてジャワにおける都市文化としての伝統芸術の新たな方向性と取り組み、現代社会における役割と可能性については、まだほとんど研究されておらず、大きな学術的意味を有する。また、私自身、ジャワ伝統芸術（舞踊、音楽）の演者として、これらの活動を、演者としての内からの眼、日本人研究者としての外からの眼という、ふたつの対照的な立場をバランスよく、効果的に用いた斬新な研究が可能であると考え。そして、社会的に排除されがちな人々を差別することから繋がることへ、そしてコミュニティへ包括していくことへのシフトが、その土地に密着した、心のよりどころとも言える伝統芸術を通して行われる過程を研究し発信していくことは、グローバル化や経済格差によって複雑になりつつある現代社会にすむ我々にも意義ある視点を提供できると考える。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 3月 29日

氏名 岡戸香里	留学先国名 インドネシア	所属機関 大阪市立大学大学院
研究テーマ：伝統芸能の新たな存在意義：コミュニティへの社会包摂的な応用の研究		
留学期間：2010年 9月～2011年 9月		
<p>インドネシア、中部ジャワのガジャマダ大学に受け入れていただき、中部ジャワ州のスラカルタ、クトアルジョ、ジョクジャカルタ特別州のジョクジャカルタ市で調査を行った。このあたりは、古くから豊か他伝統上演芸術（舞踊、ガムラン音楽、影絵芝居など）が育まれてきたが、時代の変化とともに、それらが上演される機会は減ってきている。そのなかで、より現代的な社会の要請にこたえる伝統上演芸術を使った活動が増えてきており、今回はそのいくつかの調査を重点的に行い、コミュニティでの伝統芸能の新たな存在意義を探った。また、この研究の基礎となるジャワにおける伝統芸術の意味や歴史なども、インタビューや、資料収集から行った。</p> <p>まず、中部ジャワ州クトアルジョの少年刑務所でのガムラン音楽プロジェクトの調査について述べる。この少年刑務所は、中部ジャワ州とジョクジャカルタ特別州からの、19歳以下の少年たち約80人が収容されている。今回は、2010年11月から2011年1月までの約10週間にわたり、週2回（火曜日と金曜日）のプロジェクトに、40人余りの少年たちが、午前と午後の2グループにわかれて参加した。プロジェクトは、インドネシア芸術大学（ISI）スラカルタ校の教員一人が行い、私も必要に応じて補助を行った。参加者は、13歳から19歳までの少年で、犯した罪や刑期の長さも様々であった。</p> <p>ガムランは、青銅製のこぶ付楽器類、青銅の鍵盤楽器類、木琴、太鼓、弦楽器、竹の縦笛、歌からなる、アンサンブルの総称であり、インドネシアの主に中部ジャワやバリの伝統音楽演奏に使用される。ガムラン音楽は非常に繊細で、複雑、豊かな伝統音楽であるにもかかわらず、初心者にとって非常に入りやすいという特徴を持つ。ガムランの楽器類は、はじめて演奏する、まったく音楽的バックグラウンドのない人でも、初日から演奏可能なものが多い。また、奏法の難しい楽器も比較的簡単な楽器も、アンサンブルの中では同じ重要度を持つ。その意味で、とても平等主義で、インクルーシブな伝統音楽文化と言える。西洋音楽のような指揮者はおらず、また、曲の中にも即興の要素が多分に含まれるため、演奏者は、常に他の奏者が何をしているのか、常に注意を払う必要がある。このようなガムランの持つ性質は、参加者の社会性を育てる目的にはぴったりのものであった。</p> <p>今回のプロジェクトでは、こぶ付き楽器類、鍵盤楽器類、太鼓など器楽演奏に14～15人、歌に5～6人の編成で、比較的簡単な曲からはじめた。初めの数回は、騒いだり、自分勝手な行動が目立ったが、回数を重ねるにつれて、他の理解の遅い子を助けたり、一緒に自主練習し始めるなど、参加者同士のコミュニケーションが増え、また、ガムラン練習の外でも、参加者の少年同士、少年と刑務官との関</p>		

係が、目だって良くなっていった。また、参加者への最終インタビューでも、将来に対して前向きな発言や、他人に対する思いやり、寛容、協調性を学んだという意見が多く聞かれた。ここで学んだことは、彼らが刑期を終えて、コミュニティに戻り、生活を立て直す時、彼らにとっても、コミュニティにとっても非常に役に立つのではないかと考えられる。

また、ソロ市の視覚障害児、知的障害児、ジョクジャカルタ市の自閉症児のためのガムラン音楽プログラム、ソロ市郊外の聴覚障害児のための舞踊プログラムの調査も行った。これらはすべて、インドネシア国立芸術大学の教員と、児童の通う特殊学校の教員の協働の下に行われており、カリキュラムの一部になっているところもある。いずれも、プログラムに参加するようになってから、両親が驚くほど、両親を含む他人との関係が変わってきており、寛容や、協調性が増している。また、特に視覚障害児、聴覚障害児に関しては、公演を行うことで、大きな自信につながってきており、他人とのコミュニケーション能力が格段に上がっている。また、その中から、高校や大学で伝統芸術を専攻する子も出てきている。また、公共の場でのコンサートやメディアに取り上げられることなどから、一般市民にも、彼らに対する理解が広がっており、彼らに対する差別軽減に少なからず役立っていると言える。

いずれのプログラムでの、参加者の社会性の向上がみられる。また、一般市民からの理解も増し、社会の隅に追いやられるということが、少しでも減ることに貢献していると考えられる。その意味では、これらのプログラムは、非常に社会包摂的と言えよう。また、伝統芸能を使うことにも、大きな意味がある。自分たちの先祖が伝えてきた伝統音楽を学べることを誇りに思うと述べた子たちも少なからずいた。伝統芸能は、現在衰退しており、ジャワコミュニティでの存在価値が問われている。このようなプログラムの成功は、伝統芸能に新たな価値と、コミュニティでの存在意義を生み出す可能性のあるものである。

これらは、アートの届きにくい人たちに、アートへのアクセスを増やすことで、他人、社会へのアクセスも増えた例であると考えられる。近年、日本でも社会におけるアートの役割は急速的に変わってきている。アートのためのアートだけではなく、アートは社会的変容 (social transformation) のツールとして使われ始めている。排除されがちな人々を差別することから繋がることへ、そしてコミュニティへ包括していくことへのシフトが、その土地に密着した、心のよりどころとも言える伝統芸術を通して行われる過程を調査したこの研究は、グローバル化や経済格差によって複雑になりつつある現代社会にすむ我々にも意義ある視点を提供できると考えられ、今後、論文などをどんどん発信する予定である。

研究成果の発信に関しては、2012年2月、ジョクジャカルタのガジャマダ大学で行われた、第10回URP Forum(大阪市立大学都市研究プラザ、ガジャマダ大学文化科学部、インドネシア国立芸術大学ジョクジャカルタ校共催)にて、研究成果の一部を口頭発表(英語)した。近々、英文プロシーディングスが、ウェブ掲載される予定である。また、現在、英語論文を4月中にJournalに投稿準備中である。日本語論文も、2012年度中に発表する予定である。